

# 南方（比島）

## 元近衛兵の南方転戦記

山梨県 米山 国重

近衛歩兵第五連隊（東部第八部隊）で、二年兵も終わる頃（兵長）、元国鉄に勤務していたので鉄道隊編成要員として昭和十九（一九四四）年一月、津田沼の鉄道連隊へ転属を命ぜられました。転属して兵隊の身体の小さいことと食事の量の多いことに驚きました。私達より一〇センチも小さい人達だが、食事の量は五〇%も多い。これだけの量があれば初年兵の教育中も腹いっぱいあるだろうと思いました。

階級は一等兵が多く、兵長は班長をしている。鉄道隊の本教育を受けた人が階級が下で、転属して来た人の方が階級が上では、これからどうなるのかと心配になりました。

二週間鉄道隊の教育訓練を見学、二月に入って千葉市の都賀倉庫に移動、二月十日「軍令陸甲第九号」に依り鉄道第八連隊臨時編成に入りました。召集兵が続々入隊して来て、三月三日鉄道第八連隊（通称名威第二一四四部隊）が編成されました。

三月五日、第二大隊本部、第三中隊、第四中隊は千葉駅より列車で出発しました。三月七日、下関着、乗船まで十日程もあるので安徳天皇の御陵参拝し、源平の壇ノ浦の合戦で平氏と共に入水さ

れた幼き帝を偲びました。また日露戦争の講和を結んだ春帆楼へも行きました。

三月十八日、船団八隻にて門司港出航、私達の乗った船は元アメリカの貨客船「勝鬨丸」(一万三百トン)で、その豪華さに驚きました。前後に二つずつハッチがあり、中間五〇メートルくらいが三、四段高い客室になっているのですが、床には全面に絨毯が敷き詰められておりました。私達の乗った所は貨物を積む第三ハッチの上、甲板から二段目で、蛇腹の送風機で甲板より空気を送り込み、やっと住めるような環境の悪い場所でした。

その頃は敵潜が日本近海まで出没するのでジグザグ航路を取り、三日程かかって台湾の高雄へ寄港しました。船員や将校は上陸しましたが、私達は洗面器一杯の水を貰い水浴する。船の回りには現地人が小舟でバナナ、パイナップル、パイイヤなどを売りに来て南国の味を運んでくれます。一日停泊して高雄出航。その頃より船室は蒸風呂へ

入ったような暑さで灼熱地獄です。新南群島を過ぎたころ海は不気味な程風いで、油を流したように水面が光り、さざ波一つ無い南国ならではの現象だと思いました。そして船の前を飛魚が飛び、左舷二〇メートル程の所を海豚イルカが五、六十頭、水面に跳ねたりもぐったりして泳いでいます。

四月四日、シンガポール島が見えて来ました。乗船は凪いだ海を静かに商港へ近付いて行く、港の入口に点在する小島には絵で見るとような色鮮やかな建物があり、ポプラのように背の高い木の葉がヒラヒラと南国の強い日射を受けて異国情緒豊かな風景です。午前中シンガポール商港に投錨、約一カ月ぶりで上陸大地を踏みました。ここより四、五キロ行軍してパセルパンジャンの宿舎へ入る。

四月九日、仏印進駐の命により商港にて「鶴島丸」に乗船したのですが状況悪く出航できず、停

泊待機してようやく四月二十七日に出航、四月三十日に西貢港に入港、直ちに下船して夕暮れのせまる頃オマル兵舎へ入りました。ここは元フランス軍の兵営で、真中に広い広い道路があり、両側が二階建ての大きな兵舎が五棟宛あり、ネムの大木が空を覆う程繁茂していました。真っ赤な花がぎっしりと咲いていました。

五月三日、南北ベトナムの境界を流れるダックハン河の鉄道橋修理のため列車にてカントリー(広治)に向かう。ここフランス領インドシナは占領地では無くフランスと話し合いで進駐しているので、カントリーにはフランス兵も一個中隊程駐屯しておりました。日本兵は工兵隊一個小隊、歩兵一個小隊が進駐しており、橋が落ちているので南からの物資を北へ、北からの物資を南へと川舟にて積み替えるのです。その監視に工兵隊が、警備には歩兵が当たっているのですが、私達鉄道隊二個中隊が到着したので急に賑やかになりました。

到着後直ちに資材集めに掛かり、直径四〇センチから五〇センチの丸太百本程を調達、一週間くらいで作業に入りました。第二大隊本部は橋の下流一キロ程の右岸に、第三中隊は橋の右岸に、第四中隊は橋の左岸に配置され杭打作業に入りました。しかし岩盤があるらしく作業が進捗しないので、海軍の片山明彦兵曹以下三人に応援を求め、潜水して河床を調査し範囲を拡げて杭打ちを続行しました。

その頃イギリス軍機の空襲を受けて第三中隊に一人の戦死者が出ました。僧侶だった第三中隊の武田少尉が読経して部隊葬を行いました。私は大隊本部の副官部(庶務)に配置されていたので命令、会報、戦闘詳報、作業詳報、時には手紙の検閲までしなくてはならないので多忙で、一度も現場へは行けませんでしたが、中隊から上げてくる作業状況を逐一作業詳報に残すので現場の状況はすべて把握することができました。

まだ作業途中の七月二十日、スマトラ島北部の

アチエ線運輸の命を受け陸路西貢へ向け出発しました。西貢からカンボジアのプノンペンまではメコン河のデルタ地帯で、鉄道が無いので河舟にてプノンペンへ向かい、プノンペンより先は鉄道が有るので資材を積み替え、貨車にアンペラを敷いた列車でタイのバンコクに向かいました。国境を越えるごとに為替レートが変わり、煙草一個で四十本程のバナナと交換できます。それよりマレー半島を陸路列車にて南下、ペナン、クアラルンプールを経てシンガポールへ入りました。今度の宿舎は筑紫山麓の兵営に入りました。

ここは元イギリスの兵舎で、循環式のプールなども有り、環境も良い兵舎でしたが、後統部隊にここを譲り、プキテマ競馬場の観覧席へ移動しました。この裏山にはシンガポール攻略戦の時の激戦地で数多くの碑が建っています。競馬場の前面二キロ程の所に昭南神社があり一度参拝しましたが、伊勢の皇大神宮を摸して五十鈴川もあり全く同じ配置になっています。途中の林には野猿が数

百匹保護されておりました。

この頃中部スマトラのバカンバルで中部スマトラ横断鉄道三〇〇キロの作業をしていた第一大隊の二個中隊が合流しました。

八月一日、比島転進の命により、シンガポール商港で「日金丸」(五〇〇〇トン)に乗船する。

この船は新造船と言って船首も船尾も丸くなく、平らな鋼板を溶接したような船で、内地へ運ぶボーキサイト(アルミニウムの原料)を満載しており、装甲も薄く、八ノットの航行でも船体がいなうような船でした。乗船したものの状況が悪く港内待機です。その頃は四〇度を越す高熱が五日も六日も続き、軍医より Deng 熱と診断されました。熱のため全く食事を摂れない時期が一週間くらいあり、体力も相当衰えてきました。

九月下旬シンガポール出航、ボルネオ島ミリーに寄港、皆上陸しましたが私は病後なので船に残り、戦友に飯盒一杯の砂糖とバナナを買って来て

貰いました。

十月一日ミリー出航、夕刻に船長より「今夜は海も浅く敵潜の心配もないので、充分休養をとって明日からの危険水域での対応に備えて下さい」との伝言があったので皆安心して眠りにつきまじった。

十月二日午前〇時五分、大きな爆発音で眼をさまし後方を見ると、火柱が上がって僚船か護衛艦がやられた模様でした。雲は低く海面は暗くて潜水艦からの攻撃が可能だろうか、機雷に触れたのか、私達は不安に覆われながらもいつでも退艦できるような装具をつけ始めました。

ふと船尾を見ると白い航跡が左に円を描いている。船は大きく旋回しているらしい。魚雷を避ける旋回ではないかと左舷前方を見ると魚雷の航跡らしい白い線が本船の進行方向と同方向に見えました。この魚雷は避けられたようですが、第二、第三の魚雷が本船に向かっていているだろうと思ひ、私達はそれを見ている余裕はない。早く装具を付

けてボートを降ろす準備をしなければならない。残念なことにボートの下し方は教わっていない。私は船員を探しに前甲板へ降りて行った、その瞬間大きな音と衝撃を受け前甲板は煙に覆われてしまった。前甲板へ行けないので私は艦橋へ馳せ上った。

ここで会った輸送指揮官・熊谷哲夫副官は丸腰で救命胴衣もつけず船長室の方へ走って行った。ちょうど一等航海士が艦橋より降りて来たので私達の乗るボートを尋ねると「便乗者は左舷のボート」と言うのでボートデッキへ行ったが、船はすでに左舷へ三〇度位傾いて、一番高いボートデッキも水面すれすれ、すでに水に浸かっておりました。急いでボートに乗り込みロープを外そうとしましたが船は横転、ボートと共に私達は深く海中へ引き込まれてしまいました。

百雷が落ちると言う形容詞がありますが全くその通り、物凄い音で耳が痛い、頭が割れそう、両手両足を拵げ大の字になって二転三転、深く深く

海中に引き込まれて行くのを意識しました。一瞬、色々なことを考えました。もう音も、苦しさも感じない。意識がモローとしているとき、ロープらしき物が手に触れたのですが、船に付いている物に掴まったのでは船と共に沈んでしまうと考え手を離しました。

ふと気が付くと呼吸ができるような気がする。真っ暗だが海面へ出ているらしい。周囲を見回すと左手に大きな物体が突き出している。助かった。私は海面に浮上したのだ。救命胴衣の浮力で海面に浮かび上がったのだ。左手の大きな物体は船尾だ。急に沈んだので船の中に空気が残っていて、船尾が真っ逆さまに突き出して、まだスクリュールが回っている。水面上二〇メートル程もある。

私の周り是一片に雑多な浮遊物で水面が分からぬ程だ。船にはこんなに色々なものがあつたのかと思う程の量である。逆立ちしている船から十、五メートルしか離れていない。船が沈むとき

一緒に吸い込まれはしないかと浮遊物を掻き分け、船から離れようと泳いだ。五〇メートル程離れてはじめて外に誰かいなかと探す気持ちになり周囲を見回したが人影は見当たらない。船は十分程経って吸い込まれるように静かに沈んで行った。

しばらく探していると五〇メートル程先で一片が三メートル程の水槽らしいものに登ろうとしている人影が眼に入った。浮遊物を掻き分け近付いて見ると近藤上等兵（大阪出身）だ。水槽は大きく過ぎて登れないので附近にあつた角材に抱きついて二人で浮遊したが話をする気力もない。十分程して二十人程が乗った竹筏が見つかったのでそれに泳ぎ着き、乗ろうとしたが、先に乗っている人達に拒否されてしまった。仕方ないので各自持っている命綱で身体を筏へ繫いだが大きなうねりでの海面の上下で十分もすると綱が切れてしまう。二、三度繰り返すと綱はズタズタになって使えな

くなつた。やつと頼んで乗せて貰つた。

この竹筏は台湾の高雄へ寄港する船へ積み込む筏で、台湾産の肉厚で太い竹を三段に組み合わせてあり、どの船にも二、三個を積み込むようであつた。

膝を波が洗う。この筏が何時間保つのか不安になつてくる。曇っていた空から雨が降りはじめ海面は一層暗くなつて来た。南の海とは言え濡れた身体では寒い。水の中にいた方が暖かいが、この辺は磯フカの多い海だと聞いているので寒さに震えつつも水中へは入れない。多少気持ちに余裕が出て、ほかの人達を見ると、ヒューヒューと呼吸音を立て肩で呼吸して誰も動こうとしない。暗がりの中で顔から膝へ鼻とヨダレがぶら下がっている。私も皆も同じように海中に巻き込まれ水を呑んだようだ。風は全く無いが海は大きくうねっている。一〇メートル以上も上下する。気が付くと私達の周囲には浮遊物は全く無い。この筏のみがポツンと浮かんでいる。

一滴の水もなく食糧もなく不安はつのるばかりで、皆押し黙って声を出す者もない。明るくなれば残つた護衛艦か僚船が救助してくれるかも知れない。励まし合つて軍歌を唄い始めた。

夜が明け一時間程経つた頃船らしきものが望見された。それが敵か味方か、声がそこまで届かないことも解っているが「オーイ、オーイ」と全員で呼んだ。船影らしき物はすぐ消えてしまった。

二度目の時も駄目、三回目の時は近かつたので筏の上に立つて手を振り大声で呼んだがやはり通り過ぎてしまった。その船は私達を護衛した駆逐艦であつたことが解つた。向こうからも私達を認められる距離だったのにと不安な気持ちでいると、舷に大きな網をたらしめて筏から三メートルくらいの所へ停船し、メガホンで網に跳び付くよう呼び掛けている。

うねりが大きく三メートルも上下するので簡単には跳び付けない。五人程跳び付いたが皆網目へ足をつっ込んだままで登る力は残っていない。艦

は急に動き出し五〇〇メートル行ってまた引き返して、その間に網を引き上げ、登れない者を降ろして、また網を下げて来る。三回程繰り返して全員救助された。

艦の人に聞くと停船している時に魚雷攻撃を受けるとそれをおかすことができないので長く停船できないとのことでした。魚雷を受けて船が沈むまで五分、救助されるまで十時間漂流して駆逐艦「朝風」に救助されました。

十月二日夕刻、搜索を打ち切って、無人島らしき島の入江に入り、船団の組み替えを行い、私達は三千トンの油輸送船に乗り換え、翌三日マニラへ向かいました。途中台風が巻き込まれ同じ所をぐるぐる廻っているような航海で、十月十日午前、コレヒドールを左に見てマニラ湾に入りました。港内には三十隻以上の沈船が目撃されました。午後三時頃栈橋に着きましたが私は人の背を借りて下船しました。シンガポールでの Deng

熱、そして海没、台風と続いたのでひどい脚気で歩行困難な状態でした。先の海没の時還らなかつた人は本部員三十六人の内八人で、青木巴一郎主計少尉、本田秋軍曹、田中金兵衛伍長、小出幸哉一等兵で他四人の名前は五十年の歳月で忘れてしまいました。

ひとまずマニラ駅に行きました。この頃マニラの旧城内サンチャゴには満州から転進して来た玉兵団（山梨、神奈川県人が多い）が着いたばかりで、レイテ島行きの船を待っていました。彼らはすぐレイテ島に行き、ほとんど戦死してしまいました。ルソン島の鉄道は北はサンフェルナンドから南レガスピまで一本あるのみで、それまで軍属が運転していましたが、十月から逐次私達も交替しました。私も身体の回復が思うようではなく、毎日カロカーン飛行場横の医務室へ通いました。

十月下旬、第二大隊本部はカロカーン鉄道工場

に隣接する元フィリピン女優の家に移り、通常の仕事以外に鉄道工場職員（現地人）の入出時の身体検査、作業の監視などを受け持ち多忙になりました。その頃満州より第八九一部隊が到着、各中隊に配属され、大隊本部へも三十人来ました。

十一月に入り仕事はものすごく忙しくなってきました。配置はマニラから北部を第一大隊、南部を第二大隊、マニラとルセナ間を第三中隊、ルセナとレガスピー間を第四中隊が受け持ちました。神風特攻隊の第一陣がカロカーン飛行場から出撃したのもこの頃です。

十一月三日明治節、この日の内地からの新聞にはマニラ東方海域にて敵空母二、戦艦三隻撃沈などと載っております。私達は食事も不充分で、茶呑茶碗一杯程の飯で副食は全く無い状態でした。昭和十九年のうちにレイテ島は全滅し、ルソン島には米軍は上陸して来なかったため、毎日空襲はありましたが安泰でした。大隊本部もカロカーンからバコへ移動しました。バコはスペイン人も

多く高級住宅街です。ここで南部の運転に専念しました。私は本部にばかりいて、外へ出ることが全く無いので大隊長に外の仕事をしたいと常に言っていました。

一月十九日、敵がリンガエン湾に上陸して南下をはじめ、戦況が悪くなったので、ルセナの第四中隊へ引き上げるときに橋梁など爆破するダイナマイトとガソリンを輸送する宰領を命ぜられ、一月二十一日齊藤上等兵と二人でバコからルセナに向かいました。

この頃は螢の最盛期で、数千匹の螢が立木に止まり、クリスマスツリーを見るような光景です。機関車に貨車二輛を引かせ夜半出発、途中で夜が明けたので側線に列車を入れ一日待機しました。食糧が充分無いので林に入って山芋などを採りました。上空にはマニラ空爆に向かうコンソリデッドの四発機二十機程が編隊を組んで北進していました。

夜半列車を本線へもどし出発、ルセナへは夜明

け前に着きましたが、中隊の本部が二キロ程離れていたので連絡に行っている内に夜が明け、荷物を運んでいる時に敵機の襲撃を受け機関車は破壊されてしまいました。低空での爆弾投下で爆弾にはパラシュートが付いており不発弾が駅に三個も転がっていました。

私たちはいつも本部へ来ていて顔見知りの北村衛生伍長のいる医務室へ泊めて貰いました。夕刻、不発弾処理をしていた兵隊が右腕を吹き飛ばされ、医務室へ運び込まれ応急処置をしました。が、止血が苦しくて大騒ぎするので、北村伍長が病院へ連れて行くため自動車で出掛けました。そして翌日帰って来てマニラまで行ってしまいました。

本部へ顔を出すと本部は明日北部バギオへ行くので宴会をしていたと言うのです。私達二人もその自動車に乗って行けばマニラに還れたのにと残念でした。

その日、情報通信の将校三人、下士官、兵四人

がマニラ行き列車の様子を尋ねてましたが、機関車も無く列車は出せないと言うと、無線機など機材があるのでトロッコを手配してくれと云うのでトロッコを仕立て、私達二人も同行し、九人で夜になってから徒歩でマニラに向かいました。ゲリラも出るので昼は行動できない、トロッコを林の中に入れて待機、夜になって移動するので三日掛けてパコに着きました。

パコには上等兵の駅長と二人の兵隊がいるのみで、本部はマニラにいますと言うのです。日本軍のまったくくない街を四キロ程決死の覚悟でマニラ駅に向かいました。マニラ駅には熊谷中尉、高橋軍医、満山曹長、宮井軍曹、根本伍長の五人がおり、私達二人を加えて七人となりました。

マニラ市内にはサンチャゴに野口部隊が一個中隊程いるのみで、憲兵隊までも北部バギオへ行ってしまう日本兵は全くいないのです。十日程の間南部にいる第三中隊の一部と第四中隊を、百式

鉄道牽引車で軽列車を仕立て、マニラに集結、北部バギオへ向かう心積りでいましたが、敵はすでにクラークフィールドまで南下しており、北に行けない状態になっていました。

勤兵団を北部へ輸送することもできなくなり一月三十日、振武集団の指揮に入るべしとの命令を受けました。

振武集団では食糧を持たない部隊は断わるとの連絡があり、満山主計曹長と共に食糧の確保に努力しましたが思うように集まらない。二月三日、中部のボンボン平野までこの物資を運ぶのにトラックは四台しかないので、ひとまずマリキナまで運び、ここを中継地として、そこから先はまた運ぶこととしてマニラ駅を出発しました。しかし一キロ程の所のサントトマス大学、先の十字路でアメリカ軍の戦車隊と遭遇、銃撃を受けて榊原軍曹以下十四人が戦死してしまつた。マリキナまで運んだ物資も奥地まで運ぶことはできず、丸腰でボンボンに着きました。

その後はバイタンガン渓谷へ集結、烈火山の戦闘に入りましたが、四月十二日の戦闘で部隊の大半が戦死。それ以後は食糧は全く無く、兵器もなく、毎日毎日観測機の監視の中をさまよう日々でした。生き残つた百人程はタヤバサンへ移動、林の中へ入り、壕を掘り滞在しました。その頃より栄養失調による病人が多発して死ぬ人が出始めました。また夜盲症で夜は全く見えない人ばかりでした。沢に出ると渓谷の美しい所で滝あり淵ありで景勝の地です。沢蟹などをつかまえて食べました。

五月、六月と二カ月程は割合平穏な日が続きましたが、七月には雨期に入り毎日雨が続き、食べ物を探すのも大変な時期になり、バナナの木芯などを食べていました。夜は寒いので直径二〇センチ以上ある枯木を二センチくらいの間隔で燃やすと一晩中チロチロ燃えるので、その回りに集まつて眠りました。

八月に入りお盆頃一晩に五人死にました。栄養

失調で死ぬと言っても簡単に死ぬるものではありません。二十代の体力のある人が死ぬのですから全身に痙攣を起こし、両手で虚空を掴むようにして死んでゆくのです。その人達を埋葬してやる力も残っておりません。次の夜はその死人の横に寝るのです（明日は我が身と思いなから）。飢えも半年も続くと感情までも薄れて可哀想とか自分が惨めだとかもあまり感じなくなるものだと思います。

その後は食べ物を求め、敵の戦車道路を越えてラグラ湖北へ出ました。敵の懐に入ってからの方が割合安泰な日が続きました。仙台出身の渡辺伍長と二人で水牛を一頭仕留め、三十六人の仲間で一週間程は牛肉を腹いっぱい食べました。同じ所に長くいることは危険なので先へ先へと進み、ラグラ湖畔まで出てしまいました。ここから先へは進めない。左側には山が突き出していて私達の体力ではとても越えられません。背丈を越す程の草

原の中に集まり、これから先のことを協議しました。

八戸で漁師をしていた軍曹の提案で、「この対岸はカランバなので元第四中隊の居た地域だ。地理は解る。ラグラ湖へ降りて船を奪いカランバへ渡り、住民の衣服を手に入れマニラまで潜行する。そこでボンボン蒸気の船を奪えれば途中一回の給油で内地まで還れる」と言うのです。途方もない計画だが座して飢死するか実行するか論じましたが、とにかく実行して見ようと意見が一致決行することになりました。

夜になるのを待って平地へ出て行きました。湖畔までには五〇〇メートルくらい田圃が続き、その先が遠浅の湖を五〇メートル程入った所で待機、甲州准尉と川上軍曹の二人で民家のある左側へ向かいました。三十分程すると銃声が五、六発聞こえましたがまた静かになりました。二十分程してピシャピシャと水音を立てながら二人は帰って来て、住民に発見され銃撃を受けた。計画は失

敗だと言うのです。ひとまず山へ還ることとなり  
相当な時間を掛けてまた山へ帰りました。

背丈を越す草原の中で休憩、その日の昼頃「日本兵はいないか、戦争は終わった、すぐ出て来て下さい」と言う声が聞こえ始めました。幾度も繰り返し呼び掛けて来ます。初めはアクセントがおかしいと聞き流しておりましたが度々繰り返すので兵隊が二人確認のために出て行って、日本兵が勧告に来ていることを確認して帰って来しました。

私達は何のためにこんな苦勞をしたのか。フィリピンに日本兵がいる限り敵の兵力をここに留めることになり、本土決戦の兵力を少なくできる。最後まで敵の兵力をここに留めて置くために生き残れと言われ、それを信じて、ここまで生き残って来たのに。全員で自決するかとの意見もありましたが、三浦隊長の「死ぬことはいつでもできる、ここはひとまず投降しよう」との言葉に皆出てゆくことになり、ハラハラの自警団に降りまし

た。この時の人員は十六人でした。時は昭和二十九年九月二十五日、アメリカ兵はいませんでした。

フィリピンに百万の兵を送り込み、数だけでは敵に対応できたかも知れないが、制空権、制海権を奪われ、兵器だけで無く食糧まで全く補給できなくなった。昭和十九年末で百万の兵は食無く兵器無く、ツワジワと山岳地帯へ追いやられ、戦闘らしい戦闘もなく自滅して行ったのです。その食の無い期間が一月十九日敵がルソン島リンガエンへ上陸した頃より八カ月も続いたのです。

昭和二十年四月以降は、硫黄島、沖縄戦と進攻され、報道も特攻隊等に集中され、この悲惨なフィリピンの情況など全く報道されず、四十七万もの戦死者を出したフィリピンの姿は今も知られていないのです。遺骨収集についても未だ半数にも及ばないと思います。

戦争がいかに残酷なものかと思ひ、九死に一生を得て生還し現在八十二歳まで生き残った私に何

か言えと言われたら「平和」以外言うことは無いでしょう。飢えて死んで行った何十万かの英霊の冥福を祈りつつ筆を擱おきます。

## 【解 説】

体験記筆者は、近衛歩兵第五連隊の兵長から鉄道隊編成要員として津田沼鉄道連隊へ転属を命ぜられ、鉄道第八連隊の臨時編成部隊に入る。以降南方へ、そしてフィリピン終盤戦のルソンで、鉄道部隊の機能を失い、戦野の戦闘に巻き込まれている。

わが国の鉄道部隊は、鉄道第一連隊から鉄道第二十連隊まであったが、今次大戦の初期には満州、中国大陸で活躍し、南方戦線の拡大にともなうて、仏印、ビルマへと活動舞台が拡大している。

満州へは第二、第四、第十八、第十九、第二十連隊が進出し、満州の鉄道の確保、警備、補修に

活躍し、第十九、第二十連隊は終戦時には対ソ戦に巻き込まれている。

中国戦線へは第一、第三、第六、第十二、第十三、第十四連隊が進出、湘桂線、粵漢線などの確保・運営に活躍している。

その他の連隊では、第十六、第十七連隊が内地にあって教育等の任務についていた以外、南方に展開した。

第五連隊はマレー作戦を経て泰緬鉄道の建設、確保に従事、第七連隊もシンガポール、ビルマから仏印の鉄道作戦を行い、第十連隊は明号作戦から仏印の鉄道の占領、運営に当たり、第十一連隊は泰緬鉄道の補修から泰国での防空作戦に従事している。

この中で、体験者の配属された鉄道第八連隊は、昭和十九年三月三日、千葉で編成され、体験記にあるようにスマトラからマニラへ進出、最終的にはルソンの戦いの中で戦野に離散し、全滅と

言われる中で尚武兵団に編入されて終戦を迎えている。

千葉で編成された鉄道第八連隊は、体験記によれば、三月十八日、船団八隻にて門司港出航、四月三十日に西貢港に入港・上陸、五月三日、ダックハン河の鉄道橋修理のためカントリーに向かう。

七月、西貢からペナン、クアラルンプールを経てシンガポールへ入る、とある。

八月一日、比島転進の命令を受け、九月下旬シンガポール出航、十月二日魚雷攻撃を受け、船は横転、ボートと共に筆者達は深く海中へ引き込まれる。筆者は海面に浮上助かったものの、角材に抱きついて浮遊、大波に翻弄されつつ、水も食糧もない中で十時間後に駆逐艦「朝風」に救助される。

十月十日、マニラに入る。

ここで鉄道部隊として、満州より到着した第八

九一部隊の輸送などで、すごく忙しくなってきたが、敵機の空襲で機関車は破壊され、既にマニラへの列車は出せない、昼はゲリラ、夜間移動などを強いられるという困難な状態となった。

この鉄道部隊は、トロッコでマニラへ行くとか、百武鉄道牽引車で軽列車を仕立てるなどの、鉄道部隊としては活動をしているが、既に鉄道部隊としての機能も、このようなお粗末なものになっていた。

既に米軍はリンガエン湾に上陸、本部のマニラは日本軍のいない町で、敵は既に南下を続け、一月三十一日、振武兵団の指揮下に入れとの命令を受けるが、食糧なき部隊は断ると連絡があるなど、食料の問題が部隊行動、編成を困難にし、既に統制の取れなくなった敗戦の実相を物語っている。

これはひとり鉄道部隊のみでなく、ルソンに、比島に、展開していた日本の全軍を覆った敗戦前の姿であつたらう。

四月十二日の烈火山の戦闘では、部隊の大半が戦死した。当事、筆者は「明日は我が身と思いがら、飢えも半年も続くと感情までも薄れ、可哀想とか自分が惨めだとかもあまり感じなくなつた」という。

その後は、機能部隊、特科部隊としての、ありし日の姿はなく、ただ食べ物を求め、水牛を一頭仕留めて腹いっぱい食べたり、同じ所に長くいることは危険であることから、これから先のことを協議しつつ、ただ先へ先へと移動、彷徨する兵の集団に過ぎなかつたという。

この現状を打開するため、漁師であつた軍曹の提案で、ラグラ湖で船を奪い、カランバへ渡り、マニラへ潜行しようと思ひが一致した。

その頃から「日本兵はいないか、戦争は終わった。すぐ出て来て下さい」と言う声が聞こえ始めた。幾度も繰り返し呼び掛けて来る。出てみると、日本兵が勧告に来ていることを確認し、三浦隊長の「死ぬことはいつでもできる、ここはひと

まず投降しよう」との言葉に皆出てゆくことになつた、という。

鉄道第八連隊（尚武第二一四四部隊）の終戦である。

この時の人員は僅かに十六人で、時は昭和二十年九月二十五日であつた。

種々の記録には、鉄道第八連隊は、比島で全滅したとの記録がある。

なお、鉄道部隊には、

鉄道司令部、野戦鉄道司令部、停車場司令部、及び前述の鉄道連隊のほかに、

鉄道材料廠（四）、手押軽便鉄道隊（四）、手押軽便鉄道工務隊（八）、とく率鉄道橋梁大隊、

独立鉄道工作隊、独立鉄道作業隊、などがあつた。